

生涯教育論研究に期待するもの

斎 藤 伊都夫

(日本生涯教育学会顧問)

1.

生涯教育という言葉がわが国に紹介されてから20年を経過したわけであるが、この言葉は急速に国民の間に普及して、今では教育関係者のみならず一般の人々の間にも常識語として定着するに至った。これはこの言葉がもともと教育好きの日本人の耳に魅力的に響くうえ、この2、30年来進展を続けてきたわが国の社会そのものが、新しい教育の必要に気付き始めていたことによると思われる。さらに振り返ってみると、生涯教育の考え方にたった社教審、中教審の答申が昭和46年に相ついで出されたこと、昭和54年に本学会が設立されて理論的、実践的研究が計画的に積み上げられるようになったこと、昭和56年に中教審答申「生涯教育」がまとめられたことなども、生涯教育についての多くの人々の関心と理解を促す有力な契機となった。

確かに生涯教育という言葉は多くの人々にもてはやされ、今日では誰でもが口にする言葉になった。では生涯教育の実態もこの20年間言葉の普及と歩調を合せて充実していったかということと必ずしもそうとは言えない。市

川昭午氏はその著「生涯教育の理論と構造」の中で、生涯教育はこれまでの議論の華々しさにもかかわらず「その多くが抽象的な理念論や曖昧な必要論にとどまって」実態がそれとかけ離れていたことを指摘している。即ちこれまでは生涯教育という新しい考え方の説明と、それが現代社会においてなぜ必要であるかを明らかにすることに議論が集中していた。わが国では急速な経済成長に伴って各界に教育ブームとも言うべき現象が引き起こされたが、生涯教育論がこれに対する説明原理として利用されたのはその一側面といえる。しかし一歩立ち入って生涯教育の実態やこれを推進するための実質的な理論に目を向けると意外なほど進展の跡は見られないのである。生涯教育がその名に相応しく着実に実施されその効果をあげるようになるためには、着実な研究の積み上げこそ不可欠であって、ここに今後学会が果さなければならない重要な役割があると言わなければならない。

2.

生涯教育研究が単なる理念論や必要論の域を脱して、その実態が向上発展していくようにするためには多くの課題があげられるが、その中でも第一にあげなければならないのは、生涯の各時期に固有の学習内容及び方法を研究開発することである。生涯の各時期の中で主として青少年を対象とする学校教育は既に百年以上の歴史を重ねていて、その間に実践を通じて教育内容（カリキュラム）も方法も検討と改善が続けられその基本が完成している。これに対して学校教育以外の分野即ち青少年・成人・高齢者等を対象とするいわゆる社会教育の分野では、内容や方法についての計画的な研究の積み上げは極めて貧弱で、いまだにその場当たりに必要なものを常識的に取りあげる状況である。これを喩えていうならば、学校教育には縮尺一万分の一の精密正確な地図が準備されているのに対して、学校以外の分野では手描きの略地図しか手に入れることができないままであるのに似ている。学習の方法についても事情は同じで、成人や高齢者のそれぞれ

に最適の方法はまだ確立されておらず、学校の学習方法がほとんどそのまま墮性的に社会教育でも用いられているのが現実である。これでは生涯の各時期に相応しい学習の実をあげることは困難である。

千葉県では昨年度事業として高齢者の学習内容の体系化の研究がとり上げられ筆者もこれに参画した。研究会ではまずこれまで県内各地で実践されてきた高齢者の学習内容を検討したが、そのほとんどがさまざまな年齢段階にある高齢者を一律にとらえ、学習の内容も思いつきの次元を出ないものが多かった。そこで研究会では六十歳以上の高齢者を、①なお再就職の意欲と能力をもつ高齢初期、②定職に就くことは無理だが集団活動やボランティア活動は可能な高齢中期、③集団活動は無理となって静かに余生を憩う高齢後期の三つの時期に分け、それぞれの時期に当面する生活課題を明らかにしてそこから必要な学習内容を選択配列した。学習の方法についても、高齢者の体力や心的能力の推移を充分に考慮して選ぶことにした。これはささやかな一つの試みに過ぎないが、生涯教育研究の一つの方向を示すものと考えられる。今後生涯のすべての時期にわたってこうした地道な研究が行われることが期待される。

3.

第二にあげなければならない研究課題としては「統合」の理論の解明がある。生涯教育については早くから統合の重要性が説かれてきた。生涯教育は文字通りに生涯を通じて教育が継続されるというところに特色があるのだが、単に時間的、量的に教育が長く続けられるというだけでは十分な意義を発揮したことにはならない。生涯教育の真の意義は生涯を通じてもつあらゆる教育がその人の人格に統合されることによって実現される。生涯を通じて統合される教育 lifelong integrated educationこそ真のねらいでなければならないというのである。

統合には二つの側面があることが指摘される。一つは生まれてから幼・

少・青年，成人，高齢者と時間の流れにしたがって人が一生の間にもつまざまな教育が矛盾撞着することなく，その人の人格形成に最も役立つように積み上げられることである。これは時間の流れに即するという意味で垂直的統合とよばれる。また，生涯の各時期についてみると人はある時期に専ら一つだけの教育を受けるのではなくて，同時に別々の主体から幾つかの性格の異った教育を受ける。その典型的な姿は幼少年期に見られる。即ち子供は一日の最も長い時間を家庭で過ごしてその間に両親等から家庭教育を受け，また子供の大事な務めとして毎日学校に通って義務教育を受けられる。さらに地域社会や所属する団体・グループ等からも多様な教育的影響を受ける。これらの同時に与えられる幾つかの教育が相互に矛盾したり相克したりすることなく，それぞれ特色を発揮しつつ子供の健全な成長に役立つのも統合の大事な一面である。これは横に並ぶ教育をまとめるので水平的統合とよばれる。こうした統合によって生涯教育は真の効果を発揮するのであって，これは極めて重要なことである。

ところで，統合の本質については常識的な解釈がなされているだけであって理論的なことはほとんど明らかにされていない。いったい統合とはいかなる心的構造をいうのか。それはどのような過程を経て成立するのか。統合を促進するためには何が必要であるか。統合についてはこうした問題が理論的に明らかにされていく必要がある。

生涯教育に関連して学校教育と社会教育の連携が問題にされるようになった。学社連携とよばれる問題でこれにも二つの面がある。一つは現に在学している児童生徒に対して学校と社会教育サイドとが相互に緊密に連携して教育活動を進めようという面であり，もう一つは修業年限の限られている学校教育に過重な学習内容を押しつけるのではなく，長い目で見て適時に適事が学習できるよう学習内容のあるものは社会教育に移譲するという面である。また，学社連携に類する問題として学校教育と家庭教育の役割分担の再検討という問題もある。これらはいずれも統合と深い関係がある。統合の理論が解明されることによって，こうした問題の処理についても新

しい道が開かれることが期待できる。

4.

第三の課題としてあげたいのは、生涯を通じて学ぶ人々が共通に追求すべき目標を明らかにすることである。これについては憲法の前文に日本の国家理想が示されているではないか。教育基本法第一条に日本人に共通する教育目的が示されているではないかという指摘がされるかも知れない。これらの理想や目的が生涯教育の目標と無縁でないことはいうまでもなく、求められる目標がその方向にあることも明らかである。ただしこれらはいわば演繹的に設定され上から与えられたものである。生涯を通じる教育を改めて再認識、再構成するに当たっては、学ぶものの立場から共通に切実でいけば生きた目標を把握する必要がある。生涯教育と福祉は深く関連し合っていると思われるが、この目標は福祉をも包み込むべきであろう。

以下も筆者が千葉県で体験した事例の一つである。千葉県には「生涯教育推進会議」なるものが設置されている。これは「県民の一人一人の生涯学習のために、社会の様々な教育機能を生涯教育の観点から整備充実することを目的」とするもので、構成員はおよそ教育に関係のある県内の行政、民間団体代表者のすべてを網羅していて、社会教育課が事務局を担当している。筆者はその第二部会に出席する機会をもった。これは県の教育委員会、知事部局、警察など行政機関で、その事務の一部にでも教育事業を実施している三十一課から構成されている。第二部会ではその代表者が一堂に会してそれぞれの課で実施している教育事業について報告し、連絡協力の進め方について協議するのである。これまで各課がバラバラに行ってきた教育事業がこれによって見直され調整されることになるので、生涯教育にとって極めて有意義なことである。しかも系統を異にする幾つかの部局にまたがる課を一つの会議に召集することは極めて難しいのに、千葉県ではこれが実現しているのである。生涯教育に対する理解が進んでいること

14 特集 生涯教育論(研究)に問われるもの

の何よりの証拠であると思った。ただし、そうした非常に進んだ面をもつにもかかわらずこの会では出席者の間に今一つ積極的に盛り上がる自主的なものが感じられないのである。これはすべての課の関心を盛りあげるに足る共通の目標がないからではないかと思った。生涯教育の普及にはすべての分野に共通した生涯を通じる切実な目標をもつことが重要である。

以上、生涯教育研究に期待される課題を私なりに三つあげた。まだこの外に残された重要な課題が多いと思われるが、いずれにしても生涯教育の実質を充実向上するためにこうした課題に着実に取り組むことが期待される。